

二〇一六年度入学者選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は目から目まで(17ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

スマホがある日常を考えようとするとき、私たちはスマホをどのように了解していけばいいのだろうか。私は次にあげる二点が気になっている。

一つは、従来、私たちが他者を理解するため、そして自分を他者に理解してもらおうとするためにとらざるを得なかった手続きや作法、時間や距離、それらを行使するときに私たちが使ったエネルギーをどう考えるかという点である。

ケータイやスマホを通して、私たちはつねに親密な仲間や友人とつながることができる。

(中略) こうしたコミュニケーションのあり方の変化が、逆に私たちの側にも変化をもたらし、つねに親密な仲間とつながっていたい、さらには親密な仲間が自分のことをどのように考え、見ているのかが気になり、つねにそのことを確かめたいという欲望をかきたてられる。

メールが届いたら、即座に返事をしないと落ち着かない。なぜなら返事をしないと、相手が下すであろう自分への評価——「自分のことを無視したり軽く見たりしているのではないか」——を先どりして不安にかられ、即レスを繰り返していく。

私たちのこうした行動や反応は、病理か何かのように論じられることもあるが、私はそうは思わない。(中略) 他者に対する自己提示や自己の印象操作は、スマホやケータイを介したコミュニケーションに限らず、私たちが普段から自然に行っている営みだからだ。

では何が問題なのだろうか。

それは至便さ、利便性の象徴でもある。A ではないか。

情報機器がもつ機能としての至便性である。A が、私たちの日常的なコミュニケーションや他者理解、他者への意

思や感情の表明をめぐる。A にまで介入し、この Aこそ最適だよといわんばかりに、私たちに強いてし

まっているのだ。

「さくさくとつながる」ことは、便利なことだ。しかし「さくさくと相手を理解し、さくさくと自分を相手に提示すること」は、はたして素晴らしいことなのだろうか。

かつてケータイやスマホなど想像もできなかった時代、私たちは家にある固定電話で友達と遅くまで電話をしたはずだ。電話は、リビングや廊下など、家の者が誰でも使える場所にあった。だからこそ、私たちは友たちと秘密の談話をしたり、長電話をしたりするときは、家族にわからないように工夫しただろう。

どうしたら家族にはれないように、あの子と電話できるのかを考えた時間。なんとか電話でき、深夜にこっそり二人で親密な会話を楽しめたときの楽しさや達成感。こうした営みは、けっして「さくさく」進められるものではなく、つねになんらかの困難やシヨウヘキをとまなうし、時間やエネルギーがかかるものだ。

これはけっして昔をナツかしんだり、昔はよかったとノスタルジーを語ったりしているわけではない。他者とつながり、他者を理解し、翻って自分を他者に提示する営みは、けっして「さくさく」達成されるものではなく、さまざまに困難やシヨウヘキ、長い時間や多様なエネルギーがかかるものであり、私たちはスマホの「速度」に見合うように他者とはつながれないという事実を確認したいのだ。

スマホがもつ「速度」に関連して、さらに考えられること。

それは私たちが言葉を介して他者と出会い、他者を理解していたときの「時間」や「あいまいさ」「余裕」とでもいえる何か、その「速度」によって奪われたり、変質したりしているのではないか、ということだ。

(中略)

相手のことが好きだとして、自分はどのように好きなのか。それをどのように言葉を駆使して表わせば、一番印象深く相手に伝えることができるのだろうか。

手紙を書いているとき、私たちはこうした自分の思いや言葉と格闘しているだろう。ただ、そのとき実感するのは、自分の思いを、いかに言葉で言いつくすことが難しいのかということであり、同時に、相手がどのような人間であるのかを想像しつくすことの難しさでもある。いわば、自分と他者の間に横たわる距離^②や、他者理解の困難さや奥深さを思い知らされるのである。だからこそ、なんとか言葉を駆使し、自分の思いを相手に伝えようと、さらに^③フンキし、書くことにエネルギーを投入していくのだ。

アプリでもともと用意されたスタンプや顔文字で、自分の言いたいことや気持ちが伝わるのだろうか。伝わるとしても、そのやりとりによって、他者理解のどのような部分を達成できているのだろうか。

スマホに飼いな^④されることで、従来であれば多様な言葉をつくして相手に何かを伝えようとしたときに私たちがつきこんでいた^⑤生きられた時間^⑥、大切な^⑦無駄^⑧を失ってしまったような気がするのである。

だから、スマホという^⑨ツール^⑩に対する^⑪発想^⑫や認識^⑬を変えてみてはどうだろうか。

「^⑭多^⑮孔^⑯化^⑰した^⑱現実^⑲の^⑳なか^㉑で、^㉒他^㉓者^㉔や^㉕多^㉖様^㉗な^㉘現^㉙実^㉚と^㉛平^㉜易^㉝に^㉞つ^㉟な^㊱が^㊲る^㊳こ^㊴と^㊵が^㊶で^㊷き^㊸る^㊹ツ^㊺ール^㊻と^㊼して^㊽の^㊾ス^㊿マ^㊽ホ^㊾」^㊿ではなく、^㊽「^㊾ミ^㊿ス^㊽テ^㊾リ^㊿ア^㊽ス^㊾で^㊿よ^㊽く^㊾わ^㊿か^㊽ら^㊾な^㊿い^㊽存^㊾在^㊿と^㊽して^㊾の^㊿他^㊽者^㊾と^㊽、^㊾そ^㊿れ^㊽だ^㊾け^㊿で^㊽は^㊾簡^㊿単^㊽に^㊾つ^㊽な^㊾が^㊿る^㊽こ^㊾と^㊽な^㊾ど^㊿で^㊽き^㊾は^㊿し^㊽な^㊾い^㊽ツ^㊾ール^㊿と^㊽して^㊾の^㊿ス^㊽マ^㊿ホ^㊾」^㊿とい^㊽う^㊾ふ^㊿う^㊽に^㊾。

もう一つ、私が気になっている点。それは、スマホが提供する情報や日常的現実^①に容赦なく流入してくる意味とは、いったいどのようなものなのか、考え直す必要があるのではないか、ということだ。

私たちはスマホという^②ツール^③を通して、世界中の情報^④を^⑤瞬^⑥時^⑦の^⑧う^⑨ち^⑩に^⑪入^⑫手^⑬す^⑭る^⑮こ^⑯と^⑰が^⑱で^㉑き^㉒る^㉓だ^㉔ら^㉕う^㉖。
X、それはあくまで情報であり、自分の知らない^㉗ところ^㉘で^㉙生^㉚き^㉛て^㉜い^㉝る^㉞多^㉟く^㊱の^㊲他^㊳者^㊴が^㊵、^㊶ど^㊷の^㊸よ^㊹う^㊺に^㊻そ^㊼の^㊽情^㊾報^㊿や^㊽意^㊾味^㊿と^㊽つ^㊽き^㊾あ^㊿い^㊽、^㊾生^㊿き^㊽て^㊾い^㊿る^㊽の^㊾か^㊿ま^㊽で^㊾、^㊾瞬^㊿時^㊽に^㊾わ^㊿か^㊽る^㊾わ^㊿け^㊽で^㊾は^㊿な^㊽い^㊾。

それだけではない。ある事件や歴史的出来事をめぐる情報にしても、その情報はかつて事件や出来事を体験した人びとの語

りや思い、情緒にまみれていた。つまり「³すぐには了解しづらさまざまな意味にまみれた」、その意味で「生きられたもの」だったはずだ。

Y、ヒロシマの被爆の記憶をいかにケイショウするかという問題にしても、(中略)個人の空間を被爆問題という共同性へと接続するために、平和記念公園や周辺地域におけるモバイル情報サービスなど、さまざまに拡張現実を利用する試みが始まっているという。

確かにこうしたサービスは、ただ広島という場所をめぐるだけでなく、被爆という出来事を、その場その場でスマホを利用する個人にシントウさせていく可能性をもつだろう。そして、スマホというツールが、個人の世界の間で情報を流通させるだけのものではなく、スマホを介して、個人がいかに社会問題や歴史的現実といった個人を超えた現実とつながれるかの可能性を試す意義ある試みだとも思う。

ただ、こうした試みが、先に述べた「⁴すぐには了解しづらさまざまな意味にまみれた」、その意味で「生きられたもの」を、いかに私たちに実感させてくれるのかは、その成果を今後検討する必要があるだろう。

いまは、⁴私たちはスマホに飼いならされていると思う。だからといってスマホを捨て去ることなどできはしないだろう。とすれば、このツールが瞬時のうちに多様な情報を手でできる利便性を認め、それを最大限活用する方向で生かすしかない。そのうえで、私たちが他者につきあい、他者理解をするために必須である「他者との適切な距離」などの「あいまいさ」を、スマホを駆使することですべて乗りこえることができたかのように思いこんでしまう危険性に、しっかりと気づく必要がある。

同時に、スマホというツールが、情報の圧倒的な処理感という手触りのよさを通して個人をつなげるだけではなく、個人を超えた社会問題や歴史的現象を理解することへの橋渡しとして——いわば、個人を社会や共同性、歴史につながるツールとして、いかに活用できるのかを考える必要があるのではないか。

⁵こうした作業を通して初めて、⁵私たちはスマホを飼いならすことができ、その結果、「いま、ここ」における充実した意味に満ちた他者理解の意義や難しさも、改めて実感できるのではないだろうか。

(好井裕明『違和感から始まる社会学 日常性のフィールドワークへの招待』による)

【注】

*ノスタルジー＝過去をなつかしむ気持ち。

*ツール＝道具。

*多孔化した現実＝ある社会学者が指摘した、現実の空間に目に見えない多くの穴が開き、他の場所から意味や情報が流れ込んだり、流れ出したりする状況。

問一 〓 線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二 〓 線部1「他者に対する自己提示や自己の印象操作」とあるが、これはどのような感情からの行為か。説明せよ。

問三 空欄 A に入る語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 距離 イ 速度 ウ 無駄 エ 余裕

問四 空欄 X・Y に入る語として、最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア および イ しかし
ウ まして エ たとえば

問五 〓 線部2「ミステリアスでよくわからない存在としての他者」とあるが、このように筆者が考えるのはなぜか。理由を説明せよ。

問六 〓 線部3「すぐには了解しづらいさまざまな意味」とあるが、これは具体的にはどのようなことを言っているか。説明せよ。

問七 〓 線部4「私たちはスマホに飼いならされていく」、線部5「私たちはスマホを飼いならず」とあるが、それぞれどのような状況のことを筆者は言っているか。説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

小春は幼い頃に母を亡くし、父親の成久と暮らしている。中学二年生になり、隣のクラスの悠都と付き合い始めた。小春のクラスに転校してきた葵は、ある宗教の信者で、食事の際にお祈りすることでクラスの中で敬遠されるようになった。葵と小春は朝一緒にマラソンの練習をし、朝食を共にするようになった。

「私、告げ口とかしないよ」

「うん……うん、わかってる」

「それでもお祈りするの？」

問いかけながら、まるでお前は線のどちら側だと聞いているみたいだと思ふ。葵が、小春からすればあまりに遠く、理解できないものを厭ってくるなら、仲良くなれる。けれど線のこちら側に来てくれないなら、やっぱり薄い恐怖と違和感がぬぐえない。宗教勧誘、オーラ、光、教団、家の徳。鼓膜に引っかかったまま、噛み砕けない言葉はたくさんある。葵は胸に手を当てたまま考え込んだ。しばらくしてヨーグルトの蓋を開け、いただきます、ときこちなく呟いてからスプーンで一口分をすくい取る。

けれど口をつける間際で、葵はスプーンを容器へ戻した。顔をしかめて素早く指で十字を描き、短く聞き取りにくい言葉を唱える。初めて間近で聞いてわかったことだが、葵が呟いている言葉は日本語ではなかった。英語とも、たぶん違う。こういうわけのわからなさ、余計に周囲の恐怖と違和感を煽るのだろう。

お祈りを終えて、葵ははあ、と重い溜め息を落とした。

「自分でもよくわかんない。イヤだ、って思うこともたくさんあるし、いろいろ考えて、高校を卒業したら家から離れようって決めたんだけど」

「……それなら、今はしなくてもいいじゃん」

「うん、でも……しみついてる。すぐには、切りかえられない」

ごめん、と謝られて息が詰まった。謝らせたかったわけでは、ないと思う。

「早く、やめられるようにならなきゃね。お祈りさえしなければ、葵は普通なんだし、協力するから」

本当はこちら側なのだ、誤解はすぐに解ける、となくさめるような気持ちで言った。

「うん……」

頷く葵の横顔は、今までに見たことがないほど青ざめていた。

(中略)

目の前でハンバーガーにかぶりついた悠都が不意に顔をしかめ、ちよつと、と断ってパンズのあいだから輪切りにされたトマトを引つ張り出した。小春の視線に気づき、肩をすくめる。

「トマトきらいなんだ。行儀が悪くてごめん」

「いいけど」

「でも、母親がしょっちゅう弁当にミニトマト入れる。いらないつつってんのに」

「え、じゃあいつも誰かにあげちゃうの?」

「そりゃもう、ふざけんな、俺がこれきらいなの知ってるじゃんって、抗議の意味を込めて毎回残す。ぜったい食わない」

悠都は親子間の他愛もない齟齬*そごを笑ってもらえると思っただろう。けれど小春はうまく笑えなかった。小さなトマトがスーパースーパーみたいに空の弁当箱を跳ねている様を想像する。ミニトマト。確か、先日のスーパースーパーでは一パック百九十八円だった。

「お母さん、彩りとか栄養とか考えてるんだよ」

幼稚園時代、成久がまだ図画工作を行うようなぎこちなさで弁当を詰めていた頃から、爪先立ってその手元を見ていた。キヤラ弁とか作れないけどこれでどうだ、と何種類ものふりかけを使って白米の上に虹を描いてくれた。トマトを残す、残さないといった些細なことよりも、悠都がそういうった庇護にまったくありがたみを感じず、雑に扱っていることを嫌だと感じた。子供っぽい、わかっていない、わがまま、と色の濃い感情がほとぼしる。腫れ物が弾けるみたいに、言ってしまった。「大事にされてるって、なくさないよ、わかんないんだ」

口に出した途端に、愕然とした。こんないかにも母無し子めいたこと、一番言いたくなかったはずだ。口に出せば、囚われ^{とら}る。深く骨を蝕むものを認めなければならなくなる。よっぽどひどい顔をしていたのか、悠都は弾かれたようにごめん、と謝った。違う、と首を振り、それからはろくにしゃべらずに駅前まで歩いた。悠都は別れ際までずっと、奥歯を噛んだようなしかめ面をしていた。

その日の夜は珍しく成久の帰宅が早かった。

(中略)

食後、洗い物をしている成久のそばに立って話しかけた。

「パパあ」

「んー？」

「あのさあ」

言葉に迷って間が空いた。怪訝に思ったのか、成久が水を止めて振り返る。

「どうした」

薄い鉄板が喉を塞いでいる気分だ。けれど、ごめん、と謝る悠都の声が耳に染みついている。葵の青ざめた横顔が頭から離れない。自分たちがなにと格闘しているのかすら、わからない。ゆっくりと息を吸った。

「お母さん、いなくて、別にいいんだけど。ぜんぜんなんにも困らないし、覚えてないし、さみしいとかもないから、いいんだけど。……なんか、たまに、お母さんがいる家の子と話していると、当たり前って思うことが同じじゃなくて、それで、しんどかったり、する。向こうはぜんぜん悪気がないってわかってるのに、言わなきゃいいこと、言ったり……とれない、心の癖みたいなものが……いやで」

ハンドタオルで手を拭きながら、成久はじつと小春を見つめた。小春は慌てて言葉を足した。

「だからって、パパにどうして欲しいとかじゃないから。ただ、聞いて欲しかったっていうか」

「ああ」

流しに腰を預け、成久は娘に向き直る。沈黙の後、口を開いた。

「俺なあ、このあいだ取引先の人に言われたんだよ。ビルとか経営してる、外国籍のオッサンなんだけどな。津村さんあなた、差別とかされたことないでしょう、なんとなくわかるよって」

「サベツ？」

「嫌味とか、そういうんじゃないで、単純にそう思ったから言ったんだらうな。んで、その通りなんだよ」

言葉を止め、自分の言葉が娘に届いているか確認するように目を覗く。小春はうん、と頷いた。わからないけれど、あと少しでわかるような気がした。

「大人になっても、そういうのあるんだ」

「そりゃあるよ。だから、お前がその、当たり前が違う子と一緒にいて苦しいのは、その通りだらう。向こうだって同じことを考えてるさ。だからって、どっちが悪いとかじゃないんだ」

悪くない、と言われて少しだけ気が楽になる。つまり、自分が悠都と口喧嘩くちげんかをしてしまうことも、葵のあの奇妙なお祈りを受け入れられないことも、仕方がない、ということだ。違う部分にはお互い触れずに、上手く加減して付き合っていくのが利口なのだろう。それはいかにも大人っぽい考え方がする。きっと、この世の賢い人はみんなそうしているのだ。

「わかった、そう考える」

(中略)

新着の一通を開くと、丹念に言葉を選んだらうとわかる、硬い文面が画面にあふれた。

【今日は失礼なことを言つてごめんなさい。小春さんの家庭のことを考えれば、ぜったいに言つてはいけないことでした。親のありがたみとか】

そこまで読んで、小春はたまらずスマホの画面を暗くした。違⁵う、と思う。最近ではデートのたびに悠都が聴かせてくれる、柔らかいピアノ曲が頭をよぎる。好みに合わせて、いろいろと探してくれているらしい。聴いているうちになぜだか肩の力が抜けて、ふうつと眠くなってくる。自分が好きでいてくれる誰かが、無造作に、当たり前のこととして差し出してくれるもの。

違うのだ、と強く思う。悠都は親を亡くす年でもない、たった十四歳で、ごく普通に両方の親が揃^{そろ}っているのだから、わざわざ親のありがたみなんて馬鹿げたことを考えなくて、いいのだ。それは小春の荷物だ。そして悠都がたまたまこの先、そういう巡り合わせになったら、自分の荷物として考えればいい。だけど、負う義務もない状態でそれを無理に考えさせるのは、とてもひどいことのような気がした。悠都が放つ、透^{すがすが}明で清々しい素直さが好きだ。周囲の人間を信じていて、眩^{まぶ}しい。とても大切なもののように感じる。それは、自分の黒々とした骨の染みからもっとも縁遠いものだ。遠いままで、いて欲しい。手にしたスマホが、ずっしりと重い。送られたものは読まなければならない。胸に重い金属が溜まっている気分ですまほの画面を点^とした。そこには、無神経なことを言つた、これからは親についてちゃんと考える、という反省と、許して欲しい、という謝罪が痛ましいほどの必死さで書き込まれていた。悠都は、一体どんな顔をしてこのメールを書いたのだろうか。

どっちが悪いとかじゃないんだ、と成久は言つた。利口な生き方、違う部分は加減して。そんな小綺麗^{こぎれい}な思いつきが、悠都

のメールの前にはなんの力もなく砕け散る。生まれて初めて、小春は自分に矢が届いたのを感じた。矢尻に細い糸を結び、遠い場所から放たれたそれは、強く、強く、小春に関わりたい、と訴えながら骨の間近へと食い込んだ。張りつめた糸から、悠都の怯えと震えが伝わる。ものすごく苦しくて、ものすごく重い。けれど、全身に鳥肌が立つほど、嬉しい。

だからといって、何を返せばいいだろう。母がいないということについて、長いメールを送ったところで余計に困惑させるだけだ。小春さんごめん、俺わかってなかったごめん、と筋違いの謝罪を強いてしまうだけだ。

違う、わかってもらうのではなく、小春の方が変わるべきなのだ。大人になって、骨へと染みたるくでもない飢餓を消すべきなのだ。まともで普通な、偏りのない一人になる。そうすれば、悠都を痛めないで済む。自分もなんにも後ろめたさを負わずに、他人と向き合うことができる。

ひたいを押さえ、小春は低く呻いた。目の前が塗り潰されたように黒くなる。骨どころか、肉も、皮膚も、頭の中も。その晩、いくら考えても返信は思いつかなかった。

いつのまにか、コンビニのレジ前にはおでんのコーナーが出来ていた。はんぺん百五円、と書かれたPOPを見ながら、小春は「これも生き物のソングンを踏みにするセイケイニク扱いなのだろうか」と思う。けれど、背後に並ぶ葵にはなんだか聞きにくい。二人きりの朝食でお祈りをした日から、葵はあからさまに自分の宗教にまつわる話題を避けるようになった。お祈りも、小春に見られるのを嫌がるそぶりや、軽く背中を向けてひそひそと行う。

やるならせめて堂々としていて欲しいし、やらないならすっぱりと止めて欲しい。どっちつかずな葵の情けない背中を見るたび、小春は彼女を好きになるきっかけとなった、打てば澄んだ音色が響くような孤高の強さが失われていく気がした。

(中略)

「ねえ、その、葵と同じ宗教の子って、この辺りにもけっこういるの？」

葵はちらりと口をすぼめ、迷うような間を空けた。

「そこそこ」

「みんな、葵みたいに、お昼にそれぞれの学校でお祈りしてる感じ？」

「それは、ばらばら。前に言った、家の徳の高さによっては声に出してお祈りしないでいい子もいるし、その子の性格にもよる。気の弱い子は、お祈りしなきゃいけないのにどうしても他の人の前で出来なくて、同じ学校の子に告げ口されて、集会の時に叱られて泣いてるとか、しょっちゅう」

「ハードだね」

「うん。——でもやっぱり、家の徳が高くて、周りにうまく隠せちゃってる子の方が辛^{づら}そうかな。ほら、教団を信じてるか信じてないかは関係なくさ、仲がいい子に、それを理由に嫌われるのも、しんどいし……だから、一回うまく溶け込んだ子は、自分にそういうのがあるってバレないように、ずっと気をつかってなきゃならない。ぴりぴりしてすごく攻撃的になったり、逆に、教団外の人となに話せばいいのかわからなくてずっとおどおどしてたり。これも、いろいろ」

「葵は、けっこう普通なのに」

呟くと、葵の横顔が陰った。ううん、と曖昧に喉を鳴らしてベンチに座る。コンビニの袋を開き、ふと途方に暮れたような青い顔で小春を見ると、膝にのせた右手の指をぴくりと痙攣^{けいれん}させた。わなわなと震えながら、持ち上がった指先が喉元へ触れる。

眉尻が下がった葵の顔は、途端に頼りなく、幼くなった。

「普通に、なれない」

「葵」

「きらわないで」

うつむいた顔から、大粒の涙がぼたぼたと落ちる。小春は腰を浮かせ、両腕で葵の肩を抱いた。細く、簡単に腕が回る、なんの変哲もない中学生の体だった。私も、と川があふれるように思う。私も、私も。

7
「私、ずっと、ひどいこと言ってたね」

強く抱き締めると、自分の鼻筋からもしずくが落ちた。葵のうなじへ触れて、碎ける。次から次へと、とめどなくこぼれ続けた。

数分後、あまりに長く泣き続けたせいか頭が痛くなる。葵も同じなのだろう。泣き腫らした顔を見合わせて、お互いにこめかみを押さえたままぎこちなく笑った。

「人前でこんなに泣いたの初めて」

「私も」

「なんか、首筋びちゃびちゃなんだけど……」

「ごめん」

「いいの。……いろいろあるね。小春も」

噛みしめるように呟いて、葵はなにげなく手を浮かせた。小春の頭のとっぺんへと触れて、丸く撫なでる。

神さまなんて、自分に母がいないと理解した日から信じていない。だけど生まれて初めて、がんばってる、よくがんばってる、と神さまに撫でられているみたいだと思った。そのくらい、一緒に泣いた同い年の少女の手は温かく、どこまでも小春を許していた。

(彩瀬まる『骨を彩る』による)

【注】

* 齟齬ソゴ 〓 くいちがい。

* 庇護ヒゴ 〓 (弱い立場の者などを) かばうようにして守ること。

問一 —— 線部1「口をつける間際で、葵はスプーンを容

器へ戻した」とあるが、葵はなぜ「スプーンを容器へ戻

した」のか。この時の葵の心情を説明せよ。

問二 — 線部 2「小さなトマトがスーパーボールみたいに空の弁当箱を跳ねている様」とあるが、これは何を暗示する表現か。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 息子の気持ちが伝わらずに悲しく積み重なるようす

イ 弁当箱が用途を理解されずに居心地悪く存在するようす

ウ 母親の気持ちが受け取ってもらえずに空しく漂うようす

エ トマトが食べ物だと認められずに切なく意味を失うようす

問三 — 線部 3「腫れ物が弾けるみたいに」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 思わず イ きつく

ウ すぐに エ 意地悪く

問四 — 線部 4「口に出せば、囚われる」とあるが、

I どういうことを口に出すと「囚われる」と言うのか。

口に出す内容を説明せよ。

II 「囚われる」とは、どのようなことを言っているか。説明せよ。

問五 — 線部 5「違う、と思う」とあるが、何が「違う」のか。このときの小春の気持ちを説明した文章として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 母親のいない自分が今いかに母親を求めているかを察してほしいわけではないということ。

イ 両親が揃っている悠都に今すぐに自分と同じ境遇を体験させたいわけではないということ。

ウ 母親のいない自分が今どれほど悠都の行為に傷ついたかを知らせたいわけではないということ。

エ 両親が揃っている悠都に今わざわざ親のありがたみを理解してほしいわけではないということ。

問六 — 線部 6「ものすごく苦しくて、ものすごく重い。けれど、全身に鳥肌が立つほど、嬉しい」とあるが、小春がこのように感じたのは、悠都のどんな気持ちを読み取ったからか。説明せよ。

問七 — 線部 7 『私、ずっと、ひどいこと言ってたね』

とあるが、小春は葵にどんな思いをさせていたことに
気づいたのか。説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

むかし弓をたしむ人あり。ひとり夜みちゆく。をのがわざなれば、ひめにし弓に矢を十筋そへていできるが、また道にて小竹原に入て、篠を一本切り、矢のたけにくらべ、根をそぎ、筈をつけて、十筋の矢にとりそへて持ちけり。

さてゆくに、道の真中に、その色黒きものあり。人よりは小さふして、さらに動かず。「のけ」と言へどいらへず。「いかさまに、狐むじなるべし」と思ひ、矢をはなちて射るに、手こたへしてあたると見しも、飛のく音、かねなど射るがごとし。一筋一筋と射るほどに、十筋みな射て、ただ一本のこれり。このとき、かのものうごきて、上にかづきし物をわきへのけて、飛かかるを、のこる一筋にて射とめたり。さて間近く見れば、たぬきにて、上にかづきしはなべなり。おそろしくたくみにあらずや。その十の数知りしにや。また十は数の常にして、ものごとくにこれを用ゆ。たぬきすらそれをくりてうかがふ。まして人などの智には考ふべきをや。切りそへて十一にしてゆきしは心にくく侍る。秘事はまつげのごとく、これ弓法の徳なりといへり。

すべて人にぬきでて芸ある人は、つねづねの心がけも各別なりけらし。この事にかぎらず。気をつけ心をくばらば、ものごとよくとのふべきものをや。

〔御伽物語〕による

【注】 *たしむ 〔たしなむ〕。好んであることを行うこと。 *篠 竹の一種。

*筈 弓の弦をかける、矢の上端の部分。 *むじな アナグマ。タヌキと混同されることもある。

*かづき 頭にかぶること。 *くり 順々に数えること。

*秘事はまつげのごとく 秘伝は身近にあるということ。

問一 —— 線部 1「飛のく音、かねなど射るがごとし」とあるが、何をかぶっていたからか。本文中の語句で答えよ。

問二 —— 線部 2「このとき、かのものうごきて」とあるが、ここで「かのもの」がとびかかったのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 正体がばれてしまったと考えたから。

イ これ以上は耐えられないと考えたから。

ウ 矢をすべて射てしまったと考えたから。

エ 大した武器を持っていないと考えたから。

問三 —— 線部 3「これ」とは、何か。本文中から探し、書き抜け。

問四 —— 線部 4「心にくく侍る」とあるが、筆者が感心しているのは弓をたしなむ人のどのような行動か。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 非常時に備えて予備の矢を用意したこと。

イ 獣だけでなく人もあざむく準備をしたこと。

ウ 何事にも動じずに勇敢に行動していること。
エ 自分の用いる矢をすべて手作りしていること。

問五 —— 線部 5「この事にかぎらず」とあるが、一芸に秀でている人の話には、どのような教訓があると筆者は考えているか。説明せよ。